

雪舟トーク「雪舟と大分」

工藤喬明氏（郷土史家）

スライド構成「雪舟をしのぶ」

雪舟サミットにおいて行われてきたトークは、地元が担当する習わしになっているので、大野町の文化財の世話を仰せつかっている私とその任にあたることになりました。もともと絵や歴史の知識に乏しく、雪舟の偉大な人格についても、はかり知れないものを感じはじめていた程度でありまして「雪舟と大分」という題目について発表できるかどうか、不安なまゝ今日を迎えてしまいました。このようなことから、お話しいたします内容は「雪舟をしのぶ」と申しあげた方が適切であろうと思います。すべて手作りのスライド写真を御覧いただきながら説明させていただきます。お見苦しいところが多々あると思いますがよろしく願いいたします。

皆さんはご承知のとおり雪舟は応仁元年（1469）年・遣明船に乗って山口を出帆し、平戸を経て、上海の南、寧波の天童寺に滞在して禅と水墨画の修業をいたしました。

僅かの期間ではありましたが、雪舟のすぐれた才能が認められ、要望により、すばらしい壁画を描くなどして四明天童第一座という称号をあたえられました。文明元年に帰国しましたが、京都は応仁の乱で焼け野が原になっており、山口も内乱が続いていて、絵筆をとるような雰囲気ではありませんでした。

そのため九州に上陸し、耶馬溪、彦山、日田を巡歴いたしました。日田には雪舟の庭が数ヶ所残っていると報告されております。

なお別府湾に面した日出の松屋寺には、雪舟の造った庭が、立派に保存されてあります。しばらく、行脚の旅をつづけた後、大分市（その当時は府内とっていました）の臨濟宗万寿寺を訪れました。

こゝで雪舟と大分の人々についてお話ししておきますと、桂庵玄樹は、明の国に同じ船で渡った友人で、雪舟より先に万寿寺に帰っていましたので、玄樹を頼って訪れたものと思われる。また、同じ船で明に渡った呆夫良心は、京都出身の僧といわれ、雪舟が府内に滞在していることを知って万寿寺を訪れ、文明8年に天開図画楼記を書いております。大友親繁は、大友氏15代の豊後の国主で、雪舟を歓待し、雪舟の人となり画才をよく理解して、アトリエを造り天開図画楼と名づけました。

豊後の大友氏と大野町は深いかゝりがありますのでこゝで少しふれておきますと、初代大友能直は、源頼朝より豊前豊後の守護職をあてがわれて、はじめに大野町の藤北に居を構え、その場所で死去したともいわれ、大きな五輪の墓がのこっております。

古い地図により、雪舟が大分にとどまった時代の府内、大分市の様子を推察しますと、万寿寺は五十から六十の伽藍が立ちならぶ大寺院であり、政の中心である大友の館が南方の台地にあり、極めて平穏な時代でありました。

その上野が丘の台地に古国府（ふるごう）という当時の街の様子を物語る地名がのこっております。その近くに天開図画楼が建てられてありました。

宝戒寺山門の前に「画聖雪舟、天開図画楼跡」と記した、大きな石碑が大分市の有志により建てられてあります。

呆夫良心の書いた天開図画楼記の冒頭に「画師楊公雪舟、勝地を豊府西北隅に相似し一小楼を ぬめ作り、榜に題して天開図画という。

滄海前に接し。

群峰後に連る。

孤城左に聳え。

二水右に流る

位置勢排千変万態なり。

このような景色を現地に赴いて写真にいたしますと

国東半島を遠くにのぞむ別府湾

眼を右に向けると、大分市に続く佐賀関半島

後に見える霊仙ならびに久住大船の遠望。

霊仙の山脈は、大野町に連なる。

左には高崎山のゆるやかな傾斜が別府湾に極まり、油布、鶴見がその向こうにそびえる
右に大分川、および大野川が海に注ぐ。

また天開図画楼記の一節に、雪舟のアトリエの様子が記されてあります。

「数点の残墨を求めんと欲して、来往踵を接す。鉄の門限を以て称す。亦豈其れ誣ふべけんや。戸に入りてその席次を窺い見るに粉奩、画笔左右に雑し、幅の大なる者幅の小なる者、絹の細なる者、絹の素なる者、已に画出せる者、未だ画出せざる者、巻起して棟に充ち、装して壁に掛け……志倦みて神疲るゝの時、欄に凭って一拍し襟を披いて風に当り、屢々蘇息して肺を げ以って意を絵事に す……」

このように、むつかしい語句もありますが、雪舟の旺盛な創作のありさまが察せられます。

こゝで雪舟の人となりについて、少しばかり皆さんと一緒に考えてみたいと思います。雪舟に関する書物を繙いてみますと、瓢鮎図の絵が出てまいります。瓢筆で鯰を捕えようとしているこの絵が出てまいります。瓢筆で鯰を捕えようとしているこの絵ですが、禅の修業に欠かすことのできない考察を描いたものです。京都の相国寺において雪舟の師が周文であり、その師・如拙がこれを描きました。このような経歴からして雪舟は禅の知覚を身につけた高僧であったといえましょう。

さらにこの絵は慧可断臂図といわれ達摩が面壁九年、只管打坐、悟を開こうとしている姿に感激して、慧可が弟子入りを懇願したが許されず、ついに自分の腕を切り落し捧げも

って入門を許される場面であります。左下に「四明天童第一座雪舟 行年七十七才謹描之」と記されてあります。この絵によって分かるように高齢に及ぶまで禅の神髄を貫きとうしたと思います。また、達摩の慧可の上にのしかゝる岩の表情には格別なものがあります。

雪舟は、明の國で多くの有名な絵を模写しその筆致画風を学びとりました。この写真は夏佳の慧を団扇状の円の中に写しとったものです。近景には、右に傾斜した巨大な岩、森の向うに霞の上に切り立った山岳、麓に人家を配した風景。大部分が岩による構成です。

次に雪舟の四季山水図を映してみましよう。

秋・冬・夏を一コマコマ映写します。

こうして見ますと、すべてが岩による構成であるといえましよう。

中でも夏の絵では、巨大な洞窟の上部から一条の滝が僅かな弧をえがいて落下する。

岩かげに、柵に腰をおろして、滝を仰ぎ見ている小さな人影が二人描かれてある。人の姿にくらべると滝の高さは百メートルほどにも見えるが、裾に至るも飛沫はえがかれてない。

滝壺は森にかくれている。

ここで、雪舟が大分の天開図画楼から沈墮の滝に向かってどちらの道を歩いたか、この地図によって想定してみますと....

左に記されてある道は、その当時府内（大分）と藤北を結ぶ最短コースであったと思いますが、うっそうとした原始林で雪舟の好む風景ではなかったと考えられます。

従って、大野川のほとりを遡る右のコースをえらんだと思います。

この写真は、広々とした大野川下流の風景です。

すこしばかり遡りますと、ゆるやかな流れの岸に岩が突き出てくる。

さらに遡ると大きな岩が流れを二つに分ける。

川上になるほどに、このような風景が多く見られる。

柴北川と合流する犬飼町までのぼりますとさらに岩は大きくなり、急流となる。

川づたいの路傍に、「波乗り地蔵」と刻んだ石碑が立っています。大人の背丈の二倍ほどもある岩壁に、地蔵様の姿が彫刻されてあります。それは雪舟が墨でデザインしてあったものを後になって彫ったとの言い伝えがあります。地元犬飼町では文化財に指定しており、その拓本を写させてもらいました。

小舟に乗った調和のとれた立像で、履いている靴や舟の形は、日本風ではない、また波の盛りあがり何となく異様に見えるところから、興味深い伝説であることをお伝えしておきます。

柴北川を二キロほど遡りますと、大分の万寿寺と同じ臨濟宗の大聖寺があります。

大友氏十三代の親綱公の墓があり、雪舟が万寿寺をはじめて訪れる十年ほど前に死去しているのです。大聖寺と万寿寺の往来はその当時は頻繁であったと察せられます。雪舟が沈墮に交う道中で、この寺に数回宿泊したこと、その寺の先祖より言い伝えがあり、雪舟の

造った庭もあると説明をうけました。

この写真はその大聖寺の池であります。

大聖寺の在る柴北村は、大野町に接続しており、南北朝時代のしっかりした五輪の塔や宝篋印塔が所々にありますので、村落があり道路も通じていたと推測されます。およそ十二キロの所に、先ほどもお話ししました、大友氏初代能直公をまつる勝光寺があります。

この寺についても、桂庵玄樹や大友親綱公より説明をうけているに相違なく、勝光寺に立ち寄って、田中千軒町を訪れたであります。

沈墮の滝より二キロメートルほどの所に、臨済宗の宝福寺があります。雪舟が滝の下絵を書くにしても、此の近くに二～三日は泊ったと考えられますので、この寺についても調査をお願いしてあります。

ここで、現在の沈墮の滝をご覧ください。

大野川の本流にかゝる雄滝は幅が百メートルほど、高さは二十メートルの大瀑布で、望遠レンズをとおして御覧に入れましょう。

支流の矢田川が、此所に至って岩壁より落下するさまを断崖の上からのぞき見れば、背骨の冷ゆる思いがいたします。

この写真は、滝壺に降りて、シブキを浴びながら撮影した雄滝と、竜神の伝説のある淵であります。

さて、この雪舟の鎮田瀑図は大野町が東京国立博物館の許可を得て模写した掛軸であります。

この絵を四カ所に分けて撮影してみました。先ず、これは左上の部分で、滝の落下するさまを、スピードのある線で表わしてあるのみで、落下の途中で生ずる水の変化は全々えがかれてない。

滝の下の部分では、躍動する波のみが描かれて、飛散するシブキは略してある。

右の部分の雌滝では、さらにその傾向が強く、むしろ奇異な感じさえいたします。

雪舟は肉眼で見えるものをそのまま描くのではなく、滝に向かえば滝の精のみを、松を見れば松の精を心に映じて絵にした、と思います。画面の中央の松にしても、二つの滝を一幅の絵にまとめた岩の扱いにしても雪舟独特の技法によるものでありましょう。これはいうまでもなく、雪舟が禅の修業によって体得した知覚によるものと思います。

この絵の落款は中央の岩の上にあるのは何故でしょうか、前に映した四季山水では空の部分にありますが、鎮田瀑図では空が描かれてない。「豊後州鎮田雪舟写之」と記されてあります。

明の国から帰国して間もなく描かれたこの瀑図は、大友氏に伝わり、後に肥後の加藤氏に贈られ、加藤氏除封の時、徳川氏に没収され、その後津軽氏にうつり東京の某氏が所有

していましたが、大正十二年の関東大震災で焼失してしまいました。幸にその前に写してあった口コタイプ版により実物に近い絵に接しうるのであります。

昔から多くの文人墨客が沈墮を訪れています。この掛軸は大分の画家石泉が明治の中期に描いた水墨画で、滝の上に発電用の堰堤が造られていない時代なので幾条にも分かれて落下していた様子がよく分かります。

この地方の盆踊りの口説にも、

沈墮の落てくちや十二くち

下にゃ大蛇が七柱

落つりゃ大蛇のエサとなる

とありますように素晴らしい景観でありました。

天正五年、雪舟より百年ほど後に、関白近衛前久が薩摩より京都に帰る途中に立ちよつて、

布引を、はたちあまりを重ぬとも

ふもとになりぬ豊国の滝

と詠んでおります。

なお多くの漢詩の中で江戸の儒学者・堀杏庵の作をあげますと、

飛流如雪又如虹 人骨清冷一望中

高直明々奇絶処 却疑素練落天宮

飛瀑落來決墮淵 淵深巖を忽為眩

古今此处号男女 盟久千年山與川

明治四十年に沈墮瀑布の渾大な水のエネルギーは電力に換えられる時代を迎えました。大正時代のはじめには、この地方に電燈がともり、大分市と別府の間に電車が走り、現在は一万キロワットの発電所が設置されて、人々は多くの恩恵を被っております。

大野町は、雄滝と雌滝を同時に眺め得る県道ぞいに、雪舟の鎮田瀑図を描いた大きな観光案内板を立てました。道ゆく人は誰しも足を止めて、偉大な画聖雪舟をしのぶことであらうでしょう。

参考文献

「原色日本の美術」十一巻・小学館

「雪舟」 講談社

「雪舟と大分県」 立川輝信著

「央蹟天然記念物調査報告書」

大分県立図書館蔵書

「沈墮今昔」

大分合同新聞連載

「雪舟サミット記録集」

写真

- 一、天開図画楼跡
- 二、波乗り地藏
- 三、大聖寺山門
- 四、大友能直墓石
- 五、沈墮の滝 雄
- 六、沈墮の滝 雌
- 七、鎮田瀑図

司会（羽田野）

郷土史家・工藤喬明先生によります雪舟トークングでした。会場の皆様、盛大なる拍手でお送りいただきたいと思います。

それでは、続いてアトラクションに移らせていただきます。大野町文化団体連絡協議会舞踊部会の皆さんによります「大野まつり唄」です。どうぞご覧ください。（拍手）

（踊りのアトラクション）

司会（羽田野）

大野町文化団体連絡協議会のみなさんでした。ありがとうございました。（拍手）